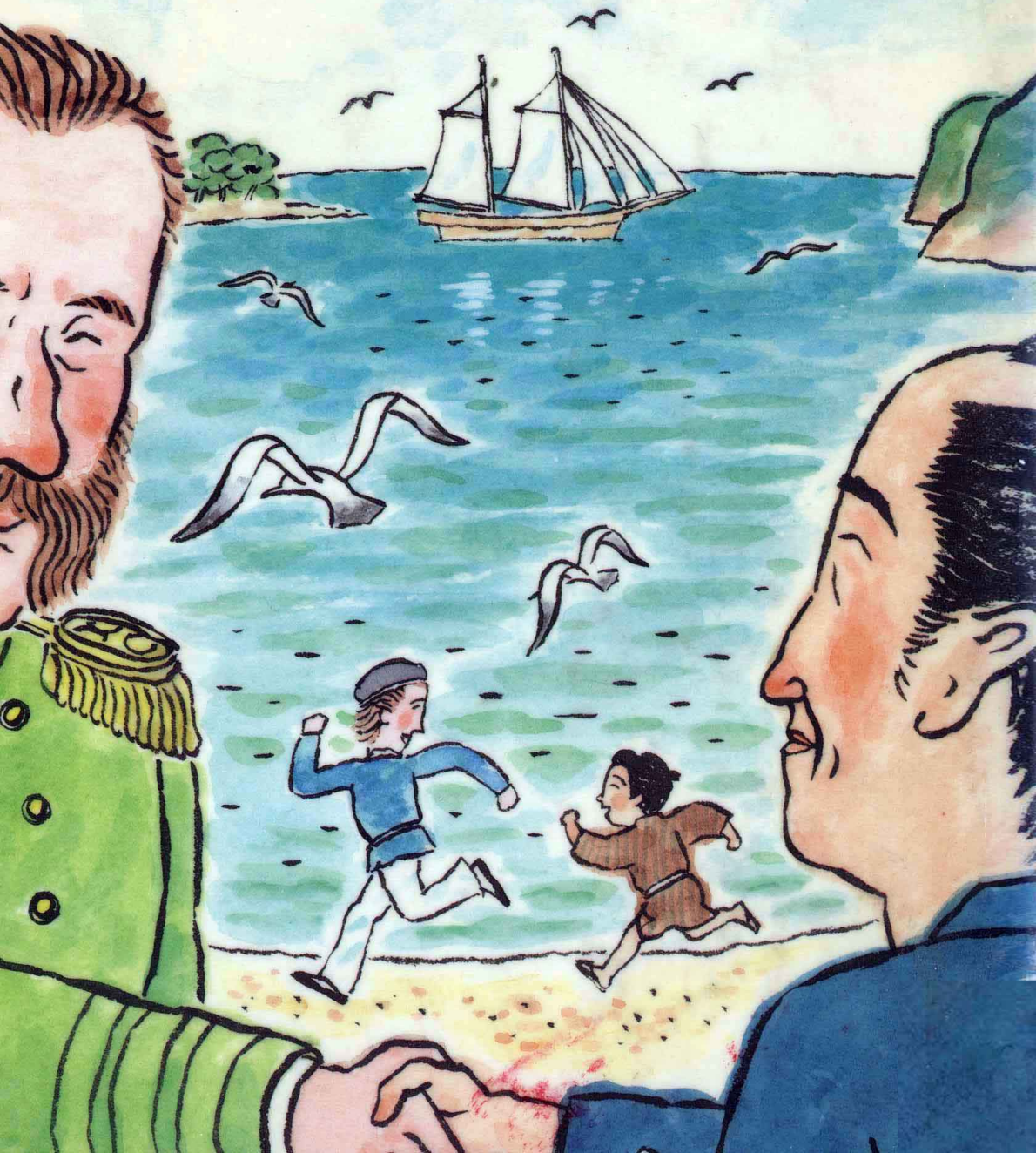


た 春に発つ船

古屋 美枝

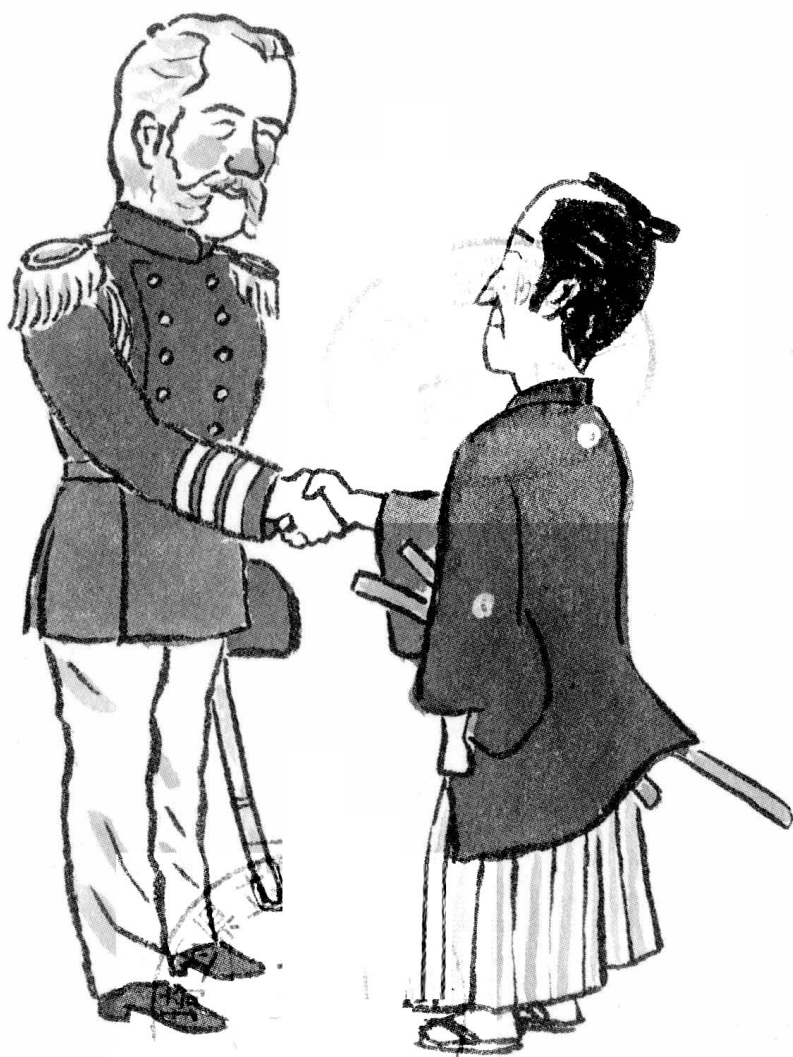
え・まえだ けん

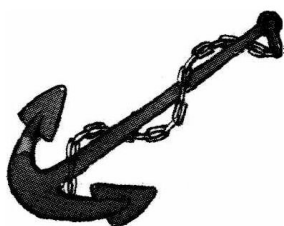


船に発つ春

古屋 美技

え・まえだ けん





●子ども世界25冊の本・児童文化の会創立25周年記念 NDC913

春に発つ船

1988年11月10日 第1刷発行

選者 古屋 美枝

画家 まえだ けん

定価 1,400円

発行者 早 船 ぐ み お

発行所 株式会社けやき書房

〒181 東京都三鷹市井の頭1-7-12

☎0422(47)6171 FAX0422(42)3919

振替・東京0-125331

写植 有限会社P&G

印刷 株式会社平河工業社

製本 株式会社三水舎

©古屋 美枝 ©まえだ けん

●ブックデザイン 作田忠一

●落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

春
に
発^た
つ
船

古屋美枝



第一章 小海の久蔵

安政地震と三本帆柱のロシヤの船……………	6
敬源寺の和尚さんのはなし……………	18
水野の殿さまのおふれ……………	30
あらしの海へ、船出できるか……………	50
おとう、動いた。ロシヤの船が動いた……………	60
わしが、元綱を切る……………	69
命つてものは、たった一つなんだ……………	76
双頭の鷲が、空へ……………	81
双頭の鷲は、きつと帰ってくる……………	88
スパシーポ、スパシーポ、スパシーポ……………	93



第二章 春に発つ船

おふくの祝言……………	98
わしらが造っている、ロシヤの新造船を…	104
ロシヤ人もきた、おふくの祝言……………	114
白木の船……………	121
もらうな、やるな、つきあうな……………	138
ロシヤ人の好きなのは、子牛がのむ乳……………	146
船おろしを見てから帰る……………	154
フタコフ、オレのお守りだ……………	163
春に発つ船……………	168
〈解説〉	
『春に発つ船』とその周辺 井野川潔……………	172



第一章

小海^{こうみ}の久蔵^{きゆうぞう}



安政地震と二本帆柱のロシヤの船

嘉永七（一八五四）年十一月二十七日のことである。

この日から、安政と改元された。

ピュピュー ザザザツ

ザザザツ ピュピュー

大瀬崎をこえて、伊豆の西海岸、小海の村に吹く西風は、あたりの黒松をゆさぶって、うなりたてている。西風がふくたびに、

ドドドツ ドドドツ ドドドツ

駿河湾にわきあがる大波は、小海の港いっばいに連なつて、まっ白いしぶきをあげる。淡島ごしにみえる富士山も、この西風に、すつきりと雲をとりはらつて、冠雪のいただきが、きらきら光っていた。

和吉は、敬願寺での手習いがおわると、大きくせのびして、本堂をはしりでた。

和吉は、十一才。おない年の宇之助と吾作、一つ年下の幸三ら四人で、敬願寺の和尚が

ひらく、寺子屋へかよっている。

「和吉ちゃん、いま、てならい、おわたたの？ ほら、みて、もみじのはが、こんなきれい。これ、ひろってあそぼうよ」

千絵が、山門のところで、和吉をまっついていて、声をかける。

千絵の父の源兵衛は、このあたりでは知られた、船元である。源兵衛の持船の一そのの弁天丸へ、和吉の父の久蔵が、船頭で乗っていることから、二人は、ちいさいときから、兄妹のように、なかがよかった。

しかも、今年の春から、兄の久吉も、弁天丸の乗子として、働くようになったことから、源兵衛と久蔵の家は、以前にもまして、深いつきあいをするようになっていた。

「ああ、千絵ちゃん。今日はあそべない。とってもせいているんだ」

和吉は、ぱつといいすてて、千絵をふりきり、敬願寺の観音堂の小山へかけのぼった。「なんだ。つまんない。せつかく和吉ちゃんを、まっていたのに」

手習いのかえりには、かならずあそんでくれる和吉が、かけてさつていくのを見て、千絵は、ぷつと、ほおをふくらませた。

山道をのぼる和吉の胸は、どんどんと太鼓を打つように、なっている。

——三本帆柱さんぼんしちゅうのロシヤの船ふねが、きのうからの西風にしふうで、宮島村みやじまむらの沖おきへ、いかりをおろしているって、和尚おしょうさんは話はなしてくれた。三本帆柱さんぼんしちゅうの船ふねって、どんな船ふねずら。どんなふうに帆ほを張はっているずら——

和吉わきちは、観音堂かんのんどうへつくと、右手みぎてをかざして、富士山ふじさんのほうを見た。

——見みえるみえる。やっぱり、でっかい船ふねだ。一本の帆柱さんぼんしちゅうは、かなりかしいでいるが、やっぱり三本帆柱さんぼんしちゅうの船ふねだ。きのう、下田しもだの港みなとをでて、戸田へだへくるはずだったと、きいていたけど、こんな西風にしふうの中なを、よく走はしってきたものだ。やっぱりよその国くにの船ふねは、つくりがちがうのかな？ たまに見みかける御用船ごようせんより大きいぞ。ああ、波なみにかくれて、見みえなくなつた。もうすこし、波なみがしずまると、船底ふなぞこのほうまで、見みえるのに——

和吉わきちは、大波おおなみに見みえかくれする、三本の帆柱さんぼんしちゅうのロシヤ船ふねを、じつと、ながめつづけた。

——十一月は、いろんなことがあるなあ。四日の朝あさは、えらい地震じしんだった。大きな津波つなみがおそってきて、下田しもだの港みなとは、だめになったという。下田しもだの村むらは、八百五十戸やっぴゃくごじゅうこあまりのうち、ぶじだったのは、たった十八戸じゅうはちこだったそうだ。おぼれ死しんだ人ひとも、五、六百人にんにもなったというし。年号ねんごうは、今日きょうから安政あんせいになったし、ロシヤの船ふねが、戸田村へだむらにくるなんて、ほんとうに、えれえこんだ——



——そうだ。和尚おしょうさんにきいたロシヤの船ふね、オレが、一番先ばんさきに見みたんだ。おとうに早はやく知しらせなくちやあ——

和吉わきちは、ひたいにあてたままの右手みぎてが、きゆうにつめたかんじると、はあつと、いきをふきかけて、観音堂かんのんどうの山道やまみちをかけおりる。

つよい西風にしは、さつきと、すこしもかわっていない。黒松くろまつの枝えだごしに、波なみしぶきが見みえる。せまい切り通きとおしをぬけて、浜はまにおりたところに、和吉わきちの家いえはある。

「おとう。おとう」

大声おおこえで、よびながら、和吉わきちは、家のなかへかけこんだ。

「和吉わきちかい？ おかえり。今日きょうは手習てないが、はやくおわったじゃないか」
台所だいどころにいた、母ははのくめがいった。

「うん。おつかあ、おとうは、どこにいる？」

「ああ、おとつあんに用事ようじがあるのかえ？ おとつあんは、さつき、船元ふなもとからの使つかいで、久吉きゆうきちとでかけていったに。まだ船元ふなもとの家いえにいるずらに」

母ははの言葉ことばを、おわりまできかないで、和吉わきちは、戸口とぐちをでた。とつぜん、かけだした、和吉わきちのいきおいに、庭にわで貝かいがらをついばんでいた、にわとりが、おどろいて、とびのいた。

海ぞいのほそい道をはしって、もう一つの切り通しをぬけたさきに、源兵衛の家がある。南むきに建てられた家を、高い石垣がめぐっている。入口ちかくの石垣が、くずれたままになっているのは、十一月四日の大地震で、まだ、修理がおわっていないのだ。

「おとつあんがね、ふねは、りょうしのいのちとおなじだ。ふねやあみが、いたんだときは、いっとうさきに、なおさなくちやあ、だめだって、いうの。それで、ふなあげばのいしづみがくずれたのをいちばんさきに、かたづけたから、うちのいりくちは、まだなおっていないの」

二、三日まえ、和吉にいった千絵の言葉が、おもいだされた。

千絵が、さつき、ひろってきたのだろう、赤いもみじの葉が二、三枚、土間にこぼれている。

そつと障子をあけると、中の板の間に、源兵衛を中心にして、父の久蔵や、兄の久吉、弁天丸の乗子の友さんや、作さんの顔がならんでいる。みんなの真剣な表情に、和吉は、さつき見たロシヤの船のことがきゆうに、話しくくなった。だまって、柱にもたれたままにしていると、

「水野のお殿さまが……」

「おふれが、なんとでますかのう……」

などと、話はなしているのが聞きこえる。どうも漁りようにでる話はなしでは、なさそうだ。

「和吉わきち、おまえ、いつきたんだ。そんなところでだまっていて。なにか用事ようじでもあるのか」

兄あにの久吉きゆうきちが、ちかよってきた。

「うん。オレ、さっきロシヤの船ふねつていうのを、見みたよ。御用船ごようせんよりも、もっとでつかく
て、帆柱ほばしらが、三本もあるんだ。ほんとうだよ、兄あにい」

「……」

「ほんとうだつてば、兄あにい。帆柱ほばしらが三本の船ふねなんて、兄あにいだつて、見みたことないら」

自分じぶんのおどろきを、そのまま、久吉きゆうきちにつたえようとする和吉わきちの声こえは、だんだんと、大き
くなつていく。

「しずかにしろ、和吉わきち。おとうたちが、ほら！」

奥おくにすわっている、源兵衛げんべえたちに、気きがねして久吉きゆうきちが、和吉わきちの口くちをおさえた。

「だって、オレ、ほんとうに、びっくりしたからよう。一番先いちばんさきに、おとうに知らさなくち
やあとおもつて、とんできただよ。兄あにい、観音堂かんのんどうにいけば、まだ、見みえるよ、ほんとう
にでっかいから」



和吉は、兄の手をはらいながら、三本帆柱のロシヤの船の大きさを、どうしたら、兄に

わかつてもらえるかと、ほんとうにびつくりしたと、なんべんもくりかえした。

「和吉、そんなところで、ごちゃごちゃいっていねえで、あがつてこい。ロシヤの船をおまえも見たのか」

源兵衛が、奥から声をかける。

「うん、おじさん。宮島村の沖にみえるよ。でつかくて、帆柱が三本もある。一本は、だいぶかしいでいるみたいだけど、和尚さんがいったとおり、やっぱり、三本の帆柱の船だよ」

「そうか。敬願寺の和尚が、おまえたちにも、話したか。実はな、わしらにも、さつき水野のお殿さまから、使いがあつてな、それを知ったばかりなのさ。下田の港へきていたロシヤの船が、このあいだの地震の津波で、船底を傷めてな、戸田で修理をするつてことで、でてきたのが、きのうの朝だよ。だがこの西風で、かじを戸田へ取ることができねえ。よく流されちまって、宮島村の沖へいっちまったつてこんだがな」

——なんだ。船元も、おとうも、もう、ロシヤの船のこと、知っていたのか、そんなら、あわ——くつて知らせにこなくても、よかつたんだ——